

穂肥、病害虫防除、水管理！今が最も重要な時期！

平成 15 年 7 月 11 日
やまがたこだわり安心米推進運動本部

1 生育概況

7月10日の農業普及課や農業試験場の生育調査によれば、平坦部の「はえぬき」は、平年に比べ、草丈は並みで、茎数と葉数はやや少ない。葉色はやや淡くなっているが指標並みである。直播の生育は、平坦部と同様の傾向となっている。なお、農業試験場の幼穂調査によれば、出穂期は平年並みからやや遅いと予想されている。

表1 幼穂からみた予想出穂期

品種名	場所	予想出穂期	平年出穂期
はえぬき	農業試験場	8月5日	8月4日
	庄内支場	8月5日	8月6日
あきたこまち	農業試験場	8月4日	8月2日
	中山間地農業研究部	8月3日	8月2日
ササニシキ	庄内支場	8月5日	8月5日

2 当面の技術対策

今まさに穂肥の時期を迎えようとしている。穂肥は m^2 当たり粒数や品質・食味を大きく左右することから、品質と食味の高い米（整粒歩合80%以上、玄米タンパク含有率7%以下）を安定生産するために、診断に基づいた無理のない施肥を基本として、以下の点に留意して当面の技術指導にあたる。

（1）穂肥対応と倒伏防止

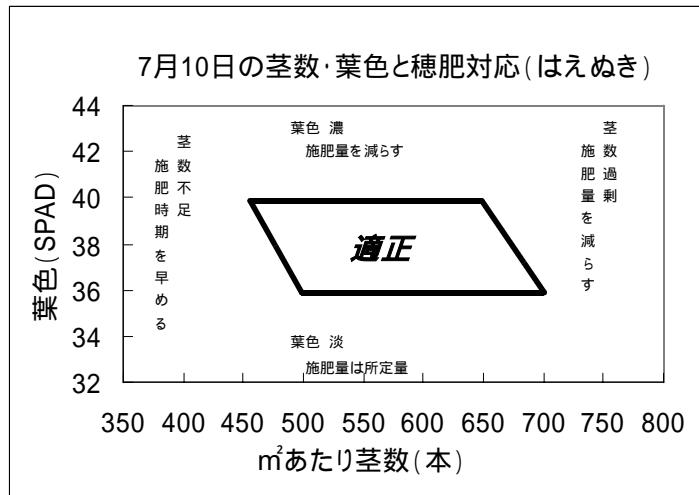
6月30日時点では出穂期が平年より2日程度早いと予想したが、その後の低温等により幼穂の発育が鈍化している。そのため、再度幼穂調査を行って、穂肥の適期を正しく把握する。

「はえぬき」では、7月10日の生育からみると適正値内の稻が多いことから、出穂25日前に窒素成分で2kg/10aの穂肥を実施する。

ほ場による生育差が大きいことから、葉色が濃く生育量の大きいほ場（茎数700本/ m^2 以上・葉色値SPAD40以上）は、出穂25日前に量を減らして穂肥を実施する。

なお、穂肥量を増やすと品質・食味が低下しやすいことから、基準施肥量を遵守する。

「ササニシキ」「あきたこまち」「コシヒカリ」など倒伏しやすい品種については、倒伏診断を行って穂肥を実施し、それでも倒伏が懸念される場合は使用基準に基づいて適正に倒伏軽減剤を使用する。



(2) 病害虫防除の徹底

斑点米カメムシ類については、7月2日に山形県病害虫防除所から注意報が発表された。被害防止のため、常日頃から畦畔や農道等の草刈りを徹底して生息密度の低減を図るが、それができない場合、畦畔、農道等の草刈りは出穂2週間前（7月15日頃）までに終了する。

休耕田や牧草地では、カメムシ類の生息密度が高くなりやすいため、地域で話し合いを行い、草刈りや耕耘および牧草の刈り取り時期の調整などの被害軽減対策を講じる。なお、発生が多いところや過去に斑点米が多くあったところでは、上記対策を徹底した上で、穗孕後期（出穂直前）の薬剤防除の追加を検討する。

葉いもちは、移植時に箱処理剤を使用したほ場を含め県内で広く発生が認められていることから、圃場の見回りを徹底し、早期発見・発生初期の防除に努める。

穂いもち防除に粒剤を計画している場合は、散布時期が遅れないよう留意する。

(3) 水管理の徹底

中干し終了直後は飽水管理とし、その後徐々に間断灌漑（2湛2落）に移行する。本年は中干しの効果が弱いと思われることから、水管理を徹底して根の活力維持を図る。また、風の強い日やフェーン風の吹走が予想される場合は、湛水して稻体の衰弱を防ぐ。

早生品種の生育進度から見て、7月20日前後に減数分裂期をむかえると予想される。この時期は冷害の影響を受けやすいため、低温が入った場合は、深水管理で幼穂を保護する。

(4) 直播栽培の管理

「はえぬき」では10葉期に生育診断を行い、この時点で茎数700本/m²以上、葉色40以上の場合は、出穂前20日に窒素成分で1.0kg/10aを基本として穗肥を実施する。

倒伏が懸念される場合は、穗孕期の落水を加えた反復落水で対応する。それでも倒伏が想定される場合は、使用基準に基づいて適正に倒伏軽減剤を使用する。

「いらない農薬は使わない！ 使う場合は適正に！ 使ったら記帳する！」

